

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

イベントとしての KL 盆踊りと共生への可能性

多和田裕司 (大阪公立大学大学院文学研究科教授)

今年 7 月 16 日、スランゴール州シャアラムのコンプレックス・スカン・ネガラでは 3 年ぶりにクアラルンプール日本人会などによるクアラルンプール (KL) 盆踊り大会が開催された。新型コロナウイルス禍による休止を経て待望久しく催されたものである。筆者は現地を訪れることはかなわなかったが、ユーチューブなどの映像を見ると、日本人、マレーシア人を問わず大勢の人が集まり、盛会であったようだ。主催者発表ではおおよそ 5 万人の人出があったという。

周知の通り、今回の盆踊り開催に先立って、イスラム教徒 (ムスリム) が盆踊りに参加することの是非についてちょっとした論争が巻き起こっていた。イスラムの教義という点で盆踊りは異教の行事であり、ムスリムが参加するのは許されないというムスリムがいる一方で、盆踊りは宗教ではなく日本の文化であり、文化的多様性の容認という観点からも参加して問題ないと考えるムスリムも多い。

言ってみれば盆踊りを「宗教」とみるか「文化」と捉えるかという解釈の違いで、対応が全く変わってくるのである。ヒジャブ (トダウン、ムスリム女性が着用するスカーフ) をまとい浴衣を着たマレー人女性が描かれたポスターは、見る者によってイスラムへの冒瀆 (ぼうとく) とも映るし、多文化共生の具象化ともとれるのだ。

しかし、盆踊りを宗教や文化に囲い込んでしまっただけなのであるか。かみ砕いて述べれば、それを宗教だ、文化だとして考えることが、人々の共生にマイナスに働いているということはないのであろうか。

筆者の知り合いに、新型コロナ禍以前に毎年盆踊りに出かけていたという若いマレー人夫婦がいる (ちなみに今年は妻の出産と重なり参加しなかったそうだ)。2 人に盆踊りについて聞いてみると、宗教や日本の文化としてではなく、楽しいイベントとして参加しているという。大勢の人が集まり、音楽に合わせてダンスをする。屋台の食べ物を食べながら、日常とは少し違う雰囲気味わう……などなど。

もちろん盆踊りについての知識を尋ねれば、日本においてイスラムとは異なる宗教にルーツを持ち、伝統文化として受け継がれ、民族衣装 (浴衣) を着る機会といった答えが返ってくる。しかし、盆踊りに参加しているその瞬間、2 人の中でことさら日本の宗教や日本の文化が意識されることはないらしい。

このような経験は、いまや多くの人の普通の生活の

中に見いだせるものである。例えば日本人にとってのクリスマスもそうだろう。知識としてはキリストの誕生祭であることは知っていても、クリスマスツリーを飾り付けたり友人同士でパーティーに興じたりする際に、起源としての宗教が意識されることはない。同じく、クリスマスは、ただちに西洋の文化として意識されることがないくらいに「日常化」されてしまっている。

すなわち、クリスマスはもはや宗教でも文化でもなく、「単なるイベント」になっているのである。「単なるイベント」という言い回しから、否定的な意味合いを感じられる方がおられるかもしれない。イベント化という言葉は、世俗化や伝統文化の消失などと共鳴し合いながら、グローバルに広がる現代消費社会を浅薄なものとして断罪する際の決まり文句ともなっている。

しかし、筆者はこの言葉を積極的な意味で使いたいと思う。宗教にせよ文化にせよ、それをを用いる人々にとっては、自分の宗教や文化こそがしばしば絶対の正義として受け取られる。正義と正義のぶつかり合いに出口は存在しない。お互いの宗教やお互いの文化を尊重してという文化相対主義の掛け声は聞こえてくるが、昨今の世界の動きはこの掛け声がいかにうわべだけのものに過ぎないかを物語っている。

それぞれが全く異なる背景を持つ個々人が共通のイベントで交流し共生すること。人々の共生を常に模索してきたマレーシアであるからこそ、KL 盆踊りの向こうに、宗教と宗教や、文化と文化の共生ではない、真の意味での「人と人の共生」につながる機会が増えていくことを願いたい。

< 筆者紹介 >

1961 年、大阪府生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科修了。博士 (人間科学)。専門は文化人類学。クランタン州をはじめとしてマレーシア各地でのフィールドワークに従事。マレーシアを手がかりに現代世界におけるイスラムの在り方を捉えるべく研究を続けている。著書に『マレー・イスラームの人類学』(ナカニシヤ出版) など。